カロリーナ・ラケル・アンティッチ
物語のはじまり

人は幼少の頃から、事ある毎に「物語」を聞かされて育つ。物語は実話もフィクションもあり形式や内容もさまざまだが、現実に目の前で起きていることを客観的に記述したものというよりは、主観的に捉えられた過去の物事やそれらを振り返った記憶などがまとめられたものが多い。そして物語は物語られるのであるから往々にして登場する人物があり、その人物の視点を通して語られるのは、人物の目を通して集められた出来事ばかりでなく風の匂いや転んだときの痛みまで、身体を通して得られる体験そのものである。語られる身になってみると、良い物語とは、定型にはまった先の見通せるものよりは、描写によってこの身体的体験を理解したり共感したりするものを言うのではないか。

カロリーナ・ラケル・アンティッチの絵画は物語である。彼女が物語ろうとするものは現実に彼女自身が体験した、あるいは日常に得たさまざまな出来事や心の揺れであり、それらは登場人物のまなざしによって我々に語りかけられる。主には子どもたちが現実の中で遭遇する恐れや苦痛、安堵や解放について、日常の生活の断片を通して、大人が正当化する社会とは異なる行動やコードを暗示している。大人になった我々に子ども時代への再訪を促し、封印してきた過去の記憶を呼び戻すことに手を貸すかのようだ。異なる次元の体験や時間を凝縮したがために、独特の印象を与える登場人物たちの目や口元の表情は、感情を損ねたかのように曖昧なものになっている。動きの少ない身体の線や、上半身だけ、あるいは頭部だけの身体のフラグメントは、子ども達の壊れやすく危うい存在を現す印象的なメタファーである。たとえ群像であっても孤立したように存在する様子は、子ども達の世界が小さな断片によって構成されているという彼等独特の宇宙を想起させ、奥行きの浅い背景と明確な地平線を持たない表現は、異空間や異次元へとつながりといった想像もかきたてるのである。とりたてて象徴的な出来事が中心に据えられているというよりは、様々なイメージが連続して現れることで、独自の意味をもった空間が創り出されることは興味深い。絵画による物語は次々と続き、つまるところ、アンティッチによるその組み合わせは無限にあり、ひとつの作品は、そこからはじまる物語を予兆しているにすぎないのかもしれない。

黒澤浩美（キュレーター）